

<抜刷り>

富士見市立資料館調査研究報告

第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
★回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

《回想》

とにかく熱かった

和田雅子（難波田城資料館）

考古館に勤務したのは昭和 59（1984）年度から平成 2（1990）年度の 7 年間。長い公務員生活のなかでも特別な 7 年間でした。

当時、事務室は、考古館に併設していた遺跡調査会事務所の 2 階にありました。

その頃、土曜日は午前中が通常開館で、午後を職員のローテーションで開館していました。しかし、来館者はほとんどいなく、のんびりとした感じでした。

事務室の窓から見える「富士山に沈む夕日」や「雪景色の中の金蔵院」など、季節ごとの景色に癒されたものでした。

ワタとの出会い

当時、民具はすべて学校空き教室に収納し、ほとんど活用されることがありませんでした。何か活用する方法はないかと思う中、資料のひとつに、かつて盛んにワタ栽培が行われていたことを物語る「綿繰り機」がありました。このほこりを被った「綿繰り機」を何とか道具として復活させたいと、わずか 8 粒（日本綿業振興会より取寄せ）でしたが、種を試験的に育て少しのワタを収穫できたのがはじまりでした。

昭和 60（1985）年度、考古館の主催事業として「ワタの栽培から機織りへ」をスタート。

下南畑の市有地約 300 m²（現在の難波田城公園内）でワタ栽培を本格的に開始しました。参加者 18 人。担当者も参加者も全員、畑作業は初めて。荒れ地を耕すところからでした。種を蒔いたところからカラスに狙われ、夏の草むしりにも手をやきました。それを支えてくれたのが隣地に住む渋谷クラさんでした。言葉では言い尽くせないほどお世話になりました。

それでも秋になると畑一面の白いワタ。



ワタ畑 種まき



綿花の収穫

喜んだのも束の間。今度は摘んでも摘んでも終わらない収穫作業。クラさんから考古館に電話が度々かかってきました。「ワタが落ちて^{たびたび}いるから早く摘みに来なよ」と。初年度の収穫量は 16 kg。300 m² 全てワタを作付けたのですから、収穫作業も当然大変でした。

^{どうゆみ}唐弓を手作りし、ワタ打ちにも挑戦しました。弓の振動でワタが解れる^{ほぐ}ことが分かり、体験することの大切さを学びました。しかし部屋中がまさしく「綿ぼこり」となり、この作業はプロに任せることにしました。

畑作業と並行して民具の聞き取りや、染色・機織りの情報収集、研修を重ね活動を広げていきました。昭和 63（1988）年には、なんとか機織り機を修復し、一反織りあげることができました。そして、参加者は考古館友の会木綿部会を結成しました。

無い無いづくしの環境下ではありましたが、当時の参加者からは「大袈裟^{おおげさ}ではなく人生が変わったわ!」という方も。今も「ワタの栽培から機織りへ」を一人で実践している方もいます。

素材を作るところから全工程を体現できるところが魅力かも知れません。

竹との出会い

竹カゴ職人、橋本能造^{よしぞう}氏との出会いは昭和 62 (1987) 年の聞き取りからでした。

淡々とした口調のなかにも職人としての重みのある言葉に当時「かっこいい」と思ったものです。体験の講師を快諾いただき同年、第1回目の「竹カゴ作り講習会」を開催しました。

「ヒゴ割り八年、仕上げ三年」という言葉を聞いていたにも関わらず、橋本氏の「大丈夫だ、できるよ」という言葉で、ヒゴを割るところから始めることに。



竹かご講習会 ひご割り



竹かご講習会
橋本氏が編み方を指導

案の定、ヒゴ割り最初の段階から怪我人が続出してしまいました。あっちでもこっちでも「流血」。無謀でした …。

しかし、参加者全員、諦めることなく編み上げることができました。大変さを知り、奥の深さを感じることはできたのは、ヒゴ割りから挑戦したからこそ得たものだったと思います。

当然ながら？橋本氏の指導のもと「竹かごの会」としてサークル化し、友の会竹カゴ部会へと発展していきました。

友の会の交流

当時、隔年で、鶴瀬駅に隣接していたサンライツホールを会場に考古館と友の会の「合同作品展」を開催していました。わずか2日間だけの会期でしたが、体験や実演コーナーも設けていました。

各部会の展示や体験をとおして、互いの活動を知るよい機会になっていました。皆さん忙しい中でも、様々な工夫をして、準備に時間を惜しむことなく、全員で作品展に取り組んでいました。

2日目の展示が終わり、片付け後に同会場では反省会も行っていました。次の作品展に向けて意見交換や各部会の方々との交流の場でもあったのです。

考古館という建物としては小さく普及事業など行うには最悪の条件だったかも知れません。しかし、当時の友の会部会員、事業参加者の皆さん、とにかく「熱かった」のです。それが十分な施設ではなかった考古館と職員を支え、育ててくれたのだと思っています。